

平景清（たいらのかげきよ）

むかし、平氏と源氏がはげしい戦いをしていました。しかし、壇ノ浦の合戦を最後に、武士でありながら貴族のような政治をした平氏は、ほろぼされてしまいました。

平氏の武将のひとり平景清は、家来とともに命からがら逃げ出しました。

「殿、ここまで来ればもうだいじょうぶでしょう。」

「そうじゃなあ。しかし、追っ手がいつやつてくるとも限らん。用心せねばな。」

「はあ。」

「ところで、辺りはもうまつ暗じゃ。きょうは、こゝらで野宿でもするか。」

「殿、向こうに家の明かりが見えます。あの家に一晚世話になったらいかがでござい
ましよう。」

「そうするか。」

景清たちは、明かりのついた家の前に立って、入口の戸をたたきました。すると、中からひとりのおばあさんが出てきました。

「道に迷^{まよ}っているうちに暗くなつてしまつて困^{こま}っている。どうか、一晩^{ひとばん}とめてもらえんか。」

と、たのみました。おばあさんは、ひとりくらしの気安さから、景清たちに親切にしてあげました。

次の日の朝、景清は、

「実は、われらは平家の落人^{おちうと}で、壇ノ浦から命からがら逃げてまいつた。いつ追つ手が来るかも知れん。ここで、しばらくかくまつてもらえんか。」

と、事情^{じじょう}を話しました。おばあさんは、少しおどろきましたが、

「こんなところでよければ、いつまでもどうぞ。」

と、かくまってあげることになしま



した。

しかし、しばらくすると、景清のことが村中でうわきになつてしまいました。村の名主・浅田八太夫の耳にもそのうわきが入つてきました。八太夫は、景清を自分の家に招き、事情をいろいろたずねました。景清は、八太夫の人がらを信用して正直に身の上を話しました。それを聞いた八太夫は、

「そうでしたか。それなら、世の中が落ち着くまで、しばらくこの村で身をかくしておかれたほうがいいでしょう。」

と、景清に同情して、芦沢の井の辺りに住まわせてあげることになりました。

信心深い景清は、日ごろから観音さんを信心していましたが、それからというもの、戦いにやぶれ命を落とした平氏の人たちのため、観音さんにいのり続けました。そんなある夜、景清の熱心ないのりが通じたのか、千手観音が夢の中に現れて、観音経を口伝えにお授けになりました。

「ああ、ありがたいことだ。これで、一門の供養ができるというものだ。」

と、景清は喜びました。それからは、感謝の気持ちをこめて、夢に見た千手観音を毎日一生けん命にほりました。そして、半月かかつて、みごとに千手観音をほりあげました。



千手観音を完成させた景清は、中秋の名月の日、村人たちの月見のために近くの山にのぼりました。美しい月が、はるかかなたの伊勢の海の波間に、その影を写していました。景清はそれをながめて、

波上に映える月影清し、わが名にかないて、おもしろかりき

（波間に照りかかやいている月影が美しい。景清というわたしの名前にあてはまって、しみじみと心がひかれることであつた）
と、うたいました。

それからの景清は、村人のひとりとしてくらすようになり、人々からいつそう尊敬され、親しまれるようになりました。景清がなくなると、村人たちは景清をとむらうために寺を建てて、千手観音を本尊としました。また、千手観音を「半月」で完成させたからとか、伊勢の海を見てうたつた波上の月が「波月」に、それが「はんつき」となつたとかいわれ、やがて、この村を「半月」と呼ぶようになりました。

吉田地区に伝わる話です。

平景清の話は、古くから芝居やうたに取り上げられ、全国に広まりました。そのため、景清伝説は各地に伝えられています。吉田の伝説では、七社神社北の芦沢の井の辺りに住んで、ここになくなつたとされていきます。村人たちは、彼をとむらうために常福寺を建てて、千手観音を本尊としました。寺の東の小山には景清の墓もあります。